

翻訳品質と翻訳プロセスの枠組 ～可操作化の記述を目指して～

山田優

関西大学

1 はじめに

近年のニューラル機械翻訳(MT)の品質は、飛躍的に向上したと産業翻訳業界においても、言われるようになり、ポストエディットを本格的に業務で活用しようとする動きが活発になってきた。コストや時間の制約があり、特定の目的のためであれば、ポストエディット(PE)で十分であるというニーズが増えてきているということでもある。他方で、そうはいっても、PE という手法は、やはり人間が最初から翻訳する人手翻訳(HT)には、品質ではかなわないという意見や調査もある[1]。Torai は、翻訳プロダクトの評価をコーパスベース翻訳研究の手法で分析して、起点言語との比較において、目的言語のタイプ・トークン比や語彙密度などを調査した結果、PE を行うことで、HT の特徴に近づいているのは事実だが、最終的には、HT と同じにはならないことを確認している。このような報告結果も考慮すると、一般的に品質の順序は、MT<PE<HT のような図式で理解されるかもしれない。

しかしながら、MT, PE, HT の差は、非常に拮抗してきているのも事実だろう。MT の品質が、PE をしなくても、HT と同等、またはそれ以上になるようなケースも多くなってきている(津山, 2019)。

実務においては HT よりも品質の劣る PE で十分だ、という曖昧な要求に応えなければならず、とりあえずコストや時間を削減して、PE をやってみることが横行している。でも実際には、MT 出力の何をどのように修正すべきなのか、そして、HT よりも何かが劣るのであれば、何かを削って PE の作業をしないと、コスト削減にならない。いま、産業翻訳で急務になっていることは、これらの「差」をできるだけ、解像度高く記述して説明することである。漠然とした、主観的品筆評価では、もはや適切な PE を実施することができない。

このような背景を受け、本稿では、「翻訳とは何か」という問いを再考すべく、それを、翻訳の「品質」と「プロセス」の観点から整理する。具体的には、翻訳とは、何に対し、どのような要素・属性を同定し、それにどのような操作を加え、どのような基準でその操作を終了させる行為かを、記述するための枠組みの概要を説明する。本稿の内容は、筆者が関与するプロジェクト「翻訳規範とコンピテンスの可操作化を通じた翻訳プロセス・モデルと統合環境の構築」(学術

振興会科学研究費基盤研究S)の一部である。

2 記述の対象と方法論

本稿は、一旦、「翻訳とはどうあるべきか」という規定的(prescriptive)な立場からの記述を試みる。対象は、産業翻訳(実務翻訳)に限定する。具体的には、ISO17100 で規定されるそれを、翻訳プロセスとみなす。その流れの上に、翻訳するための操作を対応づけて、どの段階で、誰が行う操作なのかを示すための枠組み作成の序章として、その概観を記す。

3 品質で考慮されるべき要素

3.1 翻訳と関係する要素

まず確認事項として、翻訳の品質とは絶対評価できるものではない[3]。あくまで、なにかしらの「関係」、あるいは古典的な言い方をすれば「等価関係」を翻訳(目的言語)と以下の5つの項目との間とに構築するものである[3]。ここで注意すべきことは、一般的には、起点テキストと目標テキストとの間に構築する等価関係しか、明示的に意識されていないかもしれないということである。しかし、それ以外の関係性も重要である。

1. 起点テキストとの関係(正確性など)
2. パラレルテキストとの関係(流暢性など)
3. 翻訳の目的(スコプス)との関係(ユーザビリティ)
4. 業界標準との関係(標準への準拠)
5. 翻訳者との関係(納期、コスト、翻訳者満足度)

1の起点テキストとの関係は、品質項目としては、翻訳の正確性(adequacy)、等価性、類似性などの評価と関係する。2のパラレルテキストとは、目標言語で最初から書かれた(翻訳ではない non-translated)テキストのことを示す。例えば、英語から日本語へ新聞記事を翻訳するのであれば、日本語で書かれた新聞記事が、パラレルテキストに当たる。これとの関係は、翻訳の流暢性や受容性の評価に関連する。3の翻訳の目的(スコプス)とは、一般的には、その翻訳が何のために使われるのかを示したものである。同じ原文であっても、目的によって訳し方が異なるからである。目的との関係は、ユーザビリティの判断と関連する。4の業界標準との関係とは、標準的なスタイルガイド等への準拠である。

これにより、そういった標準への合致の有無の確認が行える。そして、5 の翻訳者との関係は、翻訳者の満足度、報酬、コストや納期といった事柄と関係する。

このように見てみると、繰り返しにはなるのだが、機械翻訳などを含む一般的な翻訳では、上記でいうところの1と2くらいしか考慮されていないように思われる。その理由の一つは、おそらく、3～5の項目が、具体的かつ外在化された翻訳成果物としてテキストと、どのような関係にあるのかが、希薄に思われているからかもしれない。そこには、それらの項目との関係を示す記述の欠落もあるのだろう。

3.2 コラーの等価

さて、上述した項目が、翻訳を行うために必要なものであるならば、それらの項目を考慮した結果、実際の翻訳テキストに具体的にはどのように、影響するのだろうか。この点について、便宜的にドイツの翻訳学者、コラー(Koller)の等価区分を紹介する[4]。コラーは、対象言語学的な視座から、ソシュールのラングとパロールのパラメータに対して、翻訳が行う操作とは、まず前者のラングについては、原文と訳文の2つの言語システムに対して、言語学的(統語的)な「対応(Correspondence)」関係を構築することと考え、また後者のパロールに対しては、2つのテキスト(言語システム間)に「等価」を成り立たせるものと考えた。以下では、その等価に関する記述区分を記す。

等価タイプ	達成方法	要素
指示的	対応と、そのテキスト要素との相互作用の分析によって	語彙
暗示的	翻訳の最大の難関であり、実際には近似させるだけ	追加的局面:フォーマルさの程度、社会的誤報、地理的起源、文体的効果、頻度、範囲、評価、感情など
テキスト規範的	機能的テキスト分析を使って言語間の語法のパターンを記述し、相関させる	異なるコミュニケーション状況における話法
語用論的	特定の読者層に向けてテキストを翻訳する。他の等価の要件は無視する	異なる言語の組み合わせとテキストにおいて、異なる受容者グループに妥当なコミュニケーションの条件など
形式的	目標言語において、目標言語の可能性を利用して形式を類似させ、新しい形式を創造しさえする	韻、比喩、その他の文学的形式

表1:コラーの等価区分

3.3. ベーカーの等価

上のコラーの等価は、達成すべき等価という観点から、パロールに関係する記述がなされていたが、これに対して、翻訳学習者の指南書として有名なモナ・ベイカーによる「In Other Words」という書籍の中では[5]、翻訳者が翻訳を行う「翻訳単位」に沿って達成すべき等価の方法を解説している。下記にその単位のみを列挙する。着目すべき点を先取りして言えば、本書の範疇は、上のコラーの表で示した言語的要素に欠けている点が述べられていることである。具体的に、従来の解説書にあまり見られなかった「テク

1. 指示的等価(denotative equivalence)
テキストと参照内容(referent)との等価
2. 暗示的等価(connotative equivalence)
語彙選択、同義語、文体的な等価
3. テキスト規範的等価(text-normative equivalence)
テキストタイプ、ジャンル(cf. パラレルテキスト)との等価
4. 語用論的等価(pragmatic equivalence)
コミュニカティブな等価とも言われる。受容者重視。
E. ナイダの動的等価に近い意味。
5. (言語)形式的等価(詩的等価、formal equivalence)
詩的・美的価値観(韻、言葉遊びなど)と関係する「表現的等価」とも言われる

このような区分は、これまで翻訳学によって、様々なものが提案されてきたが、コラーの区分は、わりとシンプルに、翻訳の際に考慮すべき全体像を表していると考え、ここに引用した。また、下記の図は、これらの異なるレベルでの等価が、構成する言語的側面と関連しているのかを示した図である。

スト的等価(textual equivalence)」を扱い、「情報構造(新情報と旧情報の展開)を顧慮した、文と文のつながりを、起点と目標テキストで達成すべきだと述べている。また「等価を超えて(beyond equivalence)では、倫理、法律、業界基準などにも触れている。これは、3.1 でみた、Pym の指摘とも合致する。

1. 単語レベルの等価(word level)
2. 単語以上のレベルの等価(above word level)
3. 文法レベルの等価(grammar)
4. テキスト的等価:情報構造(information)

structures)

5. テクスト的等価: 結束性 (cohesion)
6. 語用論的等価 (pragmatics)
7. 等価を超えて (beyond equivalence: ethics, etc)

3.4 チェスタマンの翻訳方略[6]

さて、3.1～3.3 では、翻訳で考慮されるべき要素や項目、すなわち「何を考慮すべきか」を概観してきたが、これらの翻訳 (等価関係) を実際の訳出時には、「どのように達成すべきか」という、翻訳方略が必要になる。この方略は、「なに」を同定したあとの「どのような操作」の記述と読み替えることもできる。

Syntactic strategies	Semantic strategies	Pragmatic strategies
G1: Literal translation	S1: Synonymy	Pr1: Cultural filtering
G2: Loan, calque	S2: Antonymy	Pr2: Explicitness change
G3: Transposition	S3: Hyponymy	Pr3: Information change
G4: Unit shift	S4: Converses	Pr4: Interpersonal change
G5: Phrase structure change	S6: Distribution change	Pr5: Illocutionary change
G6: Clause structure change	S7: Emphasis change	Pr7: Partial translation
G7: Sentence structure change	S8: Paraphrase	Pr8: Visibility change
G8: Cohesion change	S9: Trope change	Pr9: Transediting
G9: Level shift	S10: Other semantic changes	Pr10: Other pragmatic changes
G10: Scheme change		

表2: チェスタマンの翻訳方略

例えば、上のコラーでいる「指示的」な語彙の意味を変

3.5 品質評価

上で見てきたのは、「何をどう考慮すべきか」であり、実務翻訳においては、どちらかといえば、翻訳者の操作に関係していた。最近、ISO17100 に準拠する形で、翻訳者が翻訳をした後に、翻訳者とは異なる第三者によるバイリンガルのチェック工程が要求されることが多い。そこで、チェックを担当する人が、翻訳の品質を確認するために参照するものとして、品質評価メトリクスが多く用いられるようになってきた。代表的なものは、MQM (Multidimensional Quality Metrics) であろう。近年では機械翻訳の品質評価にも用いられることがあるようだ。日本国内では、この

換 (翻訳) する際に、より具体的には、英語の原文に「New York Times」と何度が出てきた時に、「ニューヨークタイムズ紙」と繰り返すのではなく、訳文の読みやすさを向上させるために「同紙」のように訳すかもしれない。この方略は「Synonym (同義語置き換え)」として、説明される。

このような、翻訳方略の一覧を以下に記す。チェスタマンの方略リストの特徴は、「統語的方略 (syntactic strategies)」、「意味的方略 (semantic strategies)」、「語用論的方略 (pragmatic strategies)」の3本柱を設定し、これまでの翻訳研究の様々な先行研究の分類を包括している点である。尚、紙面の都合上、ここではその方略の記載に留め、詳細は割愛する。

MQM をベースに日本翻訳連盟が作成した JTF 品質評価ガイドラインがある。

これらの品質評価メトリクスは、最終的な翻訳成果物 (プロダクト) に関して、どちらかといえば、エラーや誤りがなまいだろうかといった側面に焦点をあわせた評価を行う。以下に、JTF 評価ガイドライン[7]の項目を列記する。大分類として、「正確さ」「流暢さ」「用語」「スタイル」「地域慣習」「デザイン」「事実性」の7つがある。

品質評価メトリクスは、プロダクトの評価を行うことが主目的であるが、実際には、ここまで見てきたような、翻訳に必要な項目、等価のレベルを考慮して、そして方略という操作が関与して具体化した翻訳テキストとしての成果物

A. 正確さ	B. 流暢さ	C. 用語	D. スタイル	E. 地域慣習	F. デザイン	G. 事実性
a. 誤訳 b. 抜けと余分 c. 未翻訳 d. その他	a. 誤入力 b. 誤字 c. 同音異義語誤 d. 文法誤り e. 誤用 f. コロケーション g. 待遇表現誤り h. 不整合 i. あいまい j. 読解不能 k. その他	a. 指定用語違反 b. 特定分野用語違反 c. 用語不統一 d. その他	a. 指定スタイル違反 b. 特定分野スタイル違反 c. スタイル不統一 d. その他	a. 数値形式 b. 日付形式 c. 時刻形式 d. 通貨形式 e. 度量衡形式 f. 住所形式	a. 全体デザインの問題 b. 局所フォーマットの問題 c. 長さの問題 d. 文字切れ/はみ出し e. 非表示テキスト f. マークアップ誤り g. 図表誤り h. その他	a. 当該地域で不適当 b. 最終読者に不適当 c. 法的要件欠如 d. その他

表3: JTF 品質評価ガイドラインの項目

の「結果」の評価であることを、ここで改めて再認識しておきたい。これまでの事柄と比較して、果たして、評価ガイドラインの項目は、それらとの整合性がどれだけあるのだろうか、再確認されたい。

4 翻訳プロセスと仕様

上では、翻訳の質を達成するために考慮すべき事柄、方略、チェック項目を概観したわけであるが、このセクションでは、産業翻訳における翻訳プロセス上で、記述してきた事柄や操作が、ワークフロー上のどこの段階で扱われたり、決定されているのだろうか、という関係を考える。

大雑把にそして非常に落胆的に言ってしまうと、ほとんどの項目の処理と操作は「翻訳者の頭の中」で扱われているのかもしれない。しかし、それだからと言って、いやそれゆえに、これまで、翻訳者依存とされ、このような項目や方略は「可操作化」した形で記述することが難しかった。原文に非常に文化的な要素が含まれていたとして、例えば、ある物の大きさを示す意図で「コロッケくらいの大きさ」と書かれていたとして、原文の文化でのコロッケの大きさと、日本のコロッケの大きさが、著しく異なることを翻訳者が気づいていたときに、それをどう訳したらよいか？先の記述に言及すれば、語用論的等価の実現を単語レベルで行う必要があり、方略として「Pr1: Cultural filtering」を用いることになるのだが、ここで問題となるのは、「そのような翻訳をしても、許されるのであろうか」ということだろう。

3.1 の「関係」で記したように、通常は、このような翻訳者の判断や決定が許されるとすれば、それは「翻訳の目的(スコパス)」によるのである。この目的を、実務において、より明示的に準備し共有しようというのが、ISO17100をはじめ、MQM、JTF 品質評価ガイドラインでいう「仕様」という考え方である。JTF では、翻訳の「品質」の定義を「翻訳成果物が、関係者間で事前に合意した仕様を満たす程度のこと」としている。また、JTF のガイドラインでは、品質メトリクスで確認すべき項目に対して「重み付け」という概念を導入し、翻訳の「仕様」にあわせて品質チェック項目を弾力的・動的に適用できるようにしている。

さて、ISO17100 では、このように「仕様」が重視されているのだが、その仕様をどのように作成すべきであるか、またその仕様に基づいて、品質評価項目の内容や重み付けを決定すべきであるというような、説明や記述は提供されていない。いくつかのサンプルとして、仕様(書)で、事前に、顧客や翻訳の発注者から入手しておくべき項目例があるだけで、本稿で概観したような翻訳の品質や方略と関連し、その操作のための意思決定に関わる項目が、仕様のどのような項目と関係してくるのかなどは、記載されていない。今後詳細な調査が必要となるだろう。

5 今後の展望

本稿執筆時では、具体的に、各詳細項目どうしが、関連づけられておらず、また、記述の解像度も荒い。しかし、本稿で説明した事柄が、翻訳プロセスの各ステップと関連付けられることにより、何が、いつ、誰に、どのように操作されるのか、をプロットすることをめざしている。そして、ここで列挙した項目だけで考えてみても、既存の翻訳(HT)が、数多くの要素を操作して行われていることがおわかり頂けたと思う。冒頭で述べた、MT、PE、HT の差を記述するとしても、まずは全体の把握が、非常に大事であることが、少なくとも、その膨大な情報量が、ここで再確認できた。今後は、これを精緻化させる。

6 謝辞

本研究の一部は、日本學術振興会科研費補助金基盤(S)「翻訳規範とコンピテンスの可操作化を通じた翻訳プロセス・モデルと統合環境の構築」(研究課題番号:19H05660)の支援を受けて行われた。

7 参考文献

- [1] Toral, A. (2019). Post-editing: An exacerbated translationese, *Proceedings of MT Summit XVII, volume 1*, 273-281.
- [2] 津山逸 (2019) NMT+PE=医学翻訳の新たな潮流, JTF 翻訳祭 2019.
- [3] Pym, A. (2019) “Quality” Minako O’ Hagan (ed.), pp. 437-452, *The Routledge Handbook of Translation and Technology*, London: Routledge.
- [4] Koller, W. (1979). *Einführung in die Übersetzungswissenschaft*, Heidelberg-Wiesbaden: Quelle und Meyer.
- [5] Baker, M. (1992). In *Other words: A coursebook on translation*. London: Routledge
- [6] Chesterman, A.I. (2016). *Memes of translation: The spread of ideas in translation theory, revised edition*. Amsterdam: John Benjamins.
- [7] 日本翻訳連盟, “JTF 翻訳品質評価ガイドライン,” 2018. [Online]. Available: https://www.jtf.jp/tq/pdf/jtf_translation_quality_guidelines_v1.pdf. [Accessed: 2019-12-15]